



## イタリアのサクロ・モンテ研究小史

著者	関根 浩子
雑誌名	藝叢 : 筑波大学芸術学研究誌
巻	23
ページ	117-130
発行年	2007-03-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00147370">http://hdl.handle.net/2241/00147370</a>

# イタリアのサクロ・モンテ研究小史

関根 浩子

## 序

イタリアのサクロ・モンテに関する研究はすでに長い歴史を有しているが、その歴史は日本では管見の限りまだ概説されていない。そこで、大まかにではあるが、同研究の流れや現状などをここで概観しておきたい。

### 一 二十世紀末まで

イタリアのサクロ・モンテに関する研究の流れは、学芸の進歩やそれに伴う研究方法の変化とけっして無縁ではない。従って、今日的な意味で研究と呼べるものが出現する

のは十九世紀末のことである。しかし、それまで、サクロ・モンテに関する著作がまったくなかったというわけではない。それどころか、主要な施設では、着工からほどなくして巡礼者用の案内書（今日ではこれら自体も研究の対象にされている）が出版され始めているので、サクロ・モンテ研究に類する最初のもは案内書や信心書であったといえる。まず、一五一四年に、著者不詳の詩的な『ヴァラツロの山上のキリスト御受難のカビートゥリ、すなわちミステーリに就いて』<sup>①</sup>が刊行された。これは、当時ヴァラツロの山上に建設されていた施設に関する現存する最古の案内書である。次いでF・セサツリも、一五六六、七〇、八七年にヴァラツロに関する案内書<sup>②</sup>を刊行したが、これ

らは、一五一四年の案内書が発見されるまでは最古の史料として研究者に利用された。十七世紀に入っても、ヴァラッコの施設を単独で取り上げた案内書は出版され続けた。G. B. ファッソラの『ヴァラッコの新しいエルサレム、もしくは聖墳墓』(*La nuova Gerusalemme o sia il Santo Sepolcro di Varallo, Borgosesia, 1671*) や、F. トロツティの『新しいエルサレムの歴史』(*Historia della Nuova Gerusalemme, Milano, 1686*) はその例である。案内書の出版は、その後十九世紀に再び増加し、A. M. ウッツィーノ(一八〇九年)やG. ボルディガ(一八三〇年)、M. クーザ(一八五七年)、F. トネッティ(一八七二年、一八九一年)<sup>③</sup>が、巡礼者の案内役を果たした。オルタのサクロ・モンテについては、D. G. ジェメリの『オルタのサクロ・モンテ』(*Il Sacro Monte d'Orta, Novara, 1770*)などが、また、ヴァレーゼについては、ゴタルド・ダ・ポンテの『山上の聖母マリア教会の創設と献堂』や、P. モリージャの『ヴァレーゼを見下ろす至福の山の聖母の縁起』などの案内書<sup>④</sup>が知られている。この種の案内書は、挿図が版面からモノクロ写真、そしてカラー写真へと変えられたり、内容が更新されたりすることはあっても、基本的な性

格は変えられずに、今日でも断続的に出版されている。もっとも、以上のサクロ・モンテに比べて、その他のサクロ・モンテでは、案内書の出版はそれほど多くはない。

十九世紀に入ると、ようやく、豊富な情報を提供してくれる研究書的な著作が現われる。また、研究誌上でも施設や史料が紹介されるようになる。しかし、それらにおいては、個々の施設の変遷は深く掘り下げられてはいても、記述はまだ地方的な解説の域に留まっている。この時期の著作や施設・史料紹介としては、まず、P. ガッローニがヴァラッコの施設について著した『ヴァラッコのサクロ・モンテ』(*Il Sacro Monte di Varallo, Varallo, 1909*) や、『ヴァラッコのサクロ・モンテ—美術作品の起源と展開』(*Il Sacro Monte di Varallo. Origine e svolgimento delle Opere d'Arte, Varallo, 1914*) が挙げられよう。特に後者は、それまで紹介されることがなかった史料を数多く紹介し、それらを駆使して施設の成立から十八世紀までの変遷の過程を浮かび上がらせようとしたもので、今日でも同施設の基本文献のひとつであり続けている。また、ヴァラッコの既述の最古の巡礼案内書やそれに続く貴重な案内書群の紹介、並びに文献一覧の作成や紹介を行ったA. ドゥーリオの仕事も重

要なものであろう<sup>6)</sup>。ヴァラッコの施設に対してガッローニやドゥーリオが果たした役割を、サン・ヴィヴァルドの施設に対して果たしたのは、同地の修道院長を務めたフランシスコ会神父のF. ギラルディであった。彼には、十九世紀末から一九三〇年までの間に著した多くの著書や史料紹介、論考が存在している<sup>6)</sup>。また、ヴァレーゼの巡礼施設に対しては、M. サルトリオが同じような役割を果たした<sup>7)</sup>。さらに、その他の巡礼施設についても、同じような紹介の例はそれぞれ存在している。

あるサクロ・モンテを単独で掘り下げた著作や史料紹介的論考に続いて、複数の施設を一緒に取り上げた著作もこの頃から増加し始める。これらの多くは、イタリア人自身から見れば、美術的、建築的、文化的、また、民俗的、人類学的検証といった、より大きな枠組みのなかで行われる批判的研究への道を整えたように思われる。古くは、B. マニーノが、十七世紀前半に、『アローナの聖カルロ、オルタの聖フランチェスコ、ヴァレーゼを見下ろす聖マリア、並びにヴァラッコのサクロ・モンテに就いて』(Descrizione de Sacri Monti di S. Carlo d'Arona, di S. Francesco, d'Horta, di

*Santa Maria sopra Varese e di Varallo, Milano, 1628*) において複数の施設を扱っていたが、この種の近代的研究の嚆矢となったのは、S. バトラーの有名なふたつの著作、『ピエモンテとティチーノ州の高山と巡礼施設』(*Alps and Sanctuaries of Piemont and the Canton Ticin, London, 1881*)と、『奉納像—ヴァラッコとクレアのサクロ・モンテの美術作品についての美術的研究』(*Ex voto. Studio artistico sulle opere d'arte del Sacro Monte di Varallo e di Crea, Novara, 1894*)であった。続いて、ベルリンからも、P. ゴルトハルトによって、複数のサクロ・モンテを扱った『ヴァラッコとオルタ、ヴァレーゼの聖なる山』(*Die Heiligen Berge Varallo, Orta und Varese, 1908*)が出版された。同書は、正確な平面図や写真等を掲げてサクロ・モンテ群を紹介した。当時としては非常に質の高い著作であった。それらに若干遅れて、フランスでも、L. ジレが、一九二八年に『オルターヴァラッコ—ヴァレーゼの聖なる山のなかから』(*Dans les Montagnes Sacrees Orta — Varallo — Varese, Paris*)を著してイタリアのサクロ・モンテ群を紹介した。複数のサクロ・モンテを同時に紹介、検証するという方法は、その後多くの研究者によって踏襲された。例えば、P. C. ブ

ルックス(一九七四年)<sup>(8)</sup>や、ウォーバーク研究所が輩出した碩学の一人、R. ウィットカウアーの論考(一九七八年)<sup>(9)</sup>などもこの系譜に連なるものであり、G. クブラーの論考(一九九〇年)<sup>(10)</sup>に至っては、ヨーロッパと中南米の複数の巡礼施設の比較検証へと発展している。

二十世紀も半ばを過ぎると、V. ヴィアーレやR. ロンギ、G. テストーリ、M. ベルナルディ、L. マツレ、A. M. ブリツィオ、N. ガブリエツリ、A. C. ムラート、M. L. ガッティ・ペレル、S. ランジェといった、北イタリアの当時の気鋭の研究者<sup>(11)</sup>は、特に、ルネッサンスからバロック期にかけてヴァラッコの施設の建設や堂内の裝飾に携わった建築家や美術家、並びに彼らの作品に関する批判的検証と文献学的掘り下げを行って、ガウデンツィオ・フェツラーリやガレアツォ・アレッシ、ジョヴァンニ・デンリッコ、タンツィオ・ダ・ヴァラッコ、モラッツォーネといった偉大な芸術家を再評価するようになった。そして、その結果、サクロ・モンテは、歴史的、礼拝的施設としてだけでなく、美術的、建築的、都市的総体としても評価されるようになった。

その後、一九七〇年代に入ると、アレッシの手稿本であ

る『ミステーリの書ーヴァルセージアのヴァラッコのサクロ・モンテの都市計画的、建築的、そして造形美術的プロジェクト(1565-1569)』(*Libro dei Misteri. Progetto di pianificazione urbanistica, architettonica e figurativa del Sacro Monte di Varallo in Valsesia (1565-1569)*)<sup>(12)</sup>が凸版印刷で出版(一九七四年)されたのを機に、サクロ・モンテ研究に新たな傾向が生じた。それは、アプローチ法はそれぞれ異なるものの、サクロ・モンテの建築的、都市的形成的の解明を試みる点で共通する厳密な研究であった。この時期の主要な研究者としては、C. デビアッジャやA. ボッシ、P. G. ロンゴ、G. ジェンティーレなどが挙げられるが、彼らの論考や貢献については、すでにそれらに言及した別稿を参照されたい<sup>(13)</sup>。

## 二 アルプス以北のカルヴァリオ山や十字架の道研究 と近年のイタリアにおけるサクロ・モンテ研究

さて、以上のようなイタリアのサクロ・モンテに視点を合わせた研究の流れの他に、それらにも関わる別の研究の流れもここで把握しておく必要がある。それは、「サクロ・

モンテ」の定義にも関係する、アルプス以北の「カルヴァリオ山」や「十字架の道」などの形成・発展に関する研究の流れである。アルプス以北では、それらに関する研究の基礎はすでに二十世紀初頭にはほぼ固められていたが、イタリアのサクロ・モンテ研究者の間では、それらに関する研究は、二十世紀の第4四半期に入るまで脚註にすら挙げられることはなかった。しかし、アルプス以北の研究書には、おそらくはカルヴァリオ山とサクロ・モンテを同一視する伝統から、イタリアの主要なサクロ・モンテがきまって挿入されて一緒に考察されていたのである。

アルプス以北の巡礼施設に関する研究書としてまず挙げなければならないのは、H. サーストンが著した『十字架の道』(*The Station of the Cross*, London, 1906)と『十字架の道の史的研究』(*Étude historique sur le Chemin de la Croix*, Paris, 1907)であろうが、これらについては閲覧を許されなかったため、ここでは文献名を挙げることしかできない。しかし、両著作は後代の研究にしばしば引用されており、彼が十字架の道に関して基礎的研究を行ったことは疑いない。そして、それらには、イタリアの施設も言及されているに違いない。K. A. クネラーも、サーストンとほぼ同

時期に、十字架の道信仰を西欧を視野において歴史的に跡付けようとして『十字架の道信仰の始原から完成までの歴史』(一九〇八年)を著した。彼のこの緻密な意義深い研究は三部(「十字架の道の前史と予兆」、「十字架の道信仰の発達」、「十四留の発展」)に分かれ、章としては7章から成っているが、その一部の第2章(西洋におけるエルサレム)にはイタリアの「ヴァラッロ山(Der Monte Varallo)」が挙げられて、彼によつて西洋におけるもつとも有名な「(代用の)エルサレム」(括弧は稿者による)の建設例とされている<sup>(13)</sup>。それから半世紀後の、「ドイツ美術史研究」叢書の三二三巻に収められたE. クラマーの『十字架の道とカルヴァリオ山―歴史的・建築史的分析』(一九五七年)には、今度はヴァラッロだけでなく、クレアやオルタ、ヴァレーゼ、オローバ、グラリアといったイタリアの主要なサクロ・モンテが言及され、その他の国々の巡礼施設と一緒に総合的に紹介、分析されている<sup>(14)</sup>。このようなアルプス以北における研究方法や研究姿勢は、さらに、オーストリアで学んだL. アンダーガッセンのような最近の研究者にも受け継がれている。かつてオーストリア領であった南チロルのカステルロット(カステルルス、現イタリア領)の

カルヴァリオ山を中心に論じた論考(一九九〇年)<sup>15)</sup>において、彼は、カステルロットの施設の紹介に先立ち、南チロルに建設されたカルヴァリオ山や十字架の道の複合体を、ヨーロッパに建設された類似の施設群(サクロ・モンテを含む)と類型的に比較しながら、それらの系譜上に定位置よとした。次いで、W. ブルンナーは、西欧のみならず中欧まで含む視野の下にカルヴァリオ山(サクロ・モンテを含む)の現象を把握しようと試みたが、「ヨーロッパのカルヴァリオ山」と題した論考(一九九二年)において、「…以下の章は、西欧のカルヴァリオ山の完全な歴史も統計も提供してはいない。ほとんどの国にカルヴァリオ山に関する総論がないため、今のところそれを完全に把握することはできない。それゆえ、以下の記述は、明白な叙述が可能な若干の国を除き、それぞれの国のカルヴァリオ山形成の偉大な発展の系譜を示すに留まっている」<sup>16)</sup>と述べなければならなかった。しかし、そう述べることで、彼は、各国における総括的研究と、それらを総合する全欧的研究の両方が必要であることを婉曲に呼びかけ、今後の研究方向を示したと言える。

ところで、南欧のイタリアは、既述のように、アルプス

以北の巡礼施設や、それらについての研究、並びにその方法に對して、二十世紀も第4四半期に入ってからようやく関心を向け始めた。そして、それは、管見の限り、C. デビアッジの『創設から五世紀後のヴァラツロのサクロ・モンテ―問題と研究』(一九八〇年)と題された著書<sup>17)</sup>のなかに最初に示された。しかし、彼の言及は、十五世紀中頃から「十字架の道行き」、ないしは「苦しみの道」と呼ばれる新しい種類の聖地の模造形態がゆつくりと始まったことを示唆するに留まっていた。そして、この新しい模造形態とイタリアの施設との関係については考察せずに、逆に、そうした新形態とヴァラツロの「代用エルサレム」との相違の考察の方に力点を置いた。続いて、特に、「ベルナルデイーノ・カイミーからガウデンツイオ・フェツラーリまで―サクロ・モンテの考案と演出」(一九九六年)という論考において、デビアッジとは別の捉え方によって、西欧に出現し始めた新しい模造体に再び言及したのはG. ジェンテイーレであった。彼は、イタリア外で十五世紀に建設された複数のキリストゆかりの場所の模造体と、ヴァラツロやサン・ヴィヴァルドのイタリアの模造体との類似性を指摘した他、西欧における連続的な「留」<sup>18)</sup>による複合体の建設

の流行や、『靈の通り』(Geistlich Strass, Norimberga, 1521)などの受難書や信心書(挿絵として版画が挿入された)の普及が、ヴァラッコとサン・ヴィヴァルドの施設に加えられた付加や改造に影響を与えた可能性を示唆した<sup>18)</sup>。しかし、彼らの研究は、イタリア外の十五世紀のエルサレムの模造体を、イタリアの代用エルサレムと関わりのある同時代の複合的巡礼施設として指摘するか、一緒に考察する必要性を説くに留まっていた。

これらに対し、イタリアのサクロ・モンテを、ヨーロッパのその他の国々の複合的巡礼施設とともに総合的に把握しようとする研究が、わずかに遅れてイタリアにも登場した。それは、ピエモンテ州サクロ・モンテ・デイ・クレア自然公園・調整地区の、A. バルベロ所長率いる「ヨーロッパのサクロ・モンテとカルヴァリオ、並びに複合的巡礼施設のアトラスの資料センター」(Centro di Documentazione dell'Atlante dei Sacri Monti, Calvari e Complessi devzionali europei)が、一九九六年に本格的な取組みとして開始したものであった。同センターは、調査方法として、まず、調査表(1. 歴史的データ、2. 管理・運営のデータ、3. 資料、から成る)を作成し、それらをヨーロ

ッパ各国の計二千に及ぶ公的機関に送付して記入後返信してもらい、類似施設の存在の有無や現状などを具体的に把握することから開始した。また、当該施設に関する文献や写真資料などがある場合は返信時に同封してもらうことで、資料や情報の収集にも努めた。そして、二〇〇一年には、回収された千八百十二件の調査表と、協力者から得たチェコ共和国やウクライナ、スロベニア、クロアチアなどの施設に関する情報を基に、膨大な数の複合的巡礼施設の場所を示した地図を添えて、調査結果の一部を刊行した。それが『ヨーロッパのサクロ・モンテとカルヴァリオ、並びに複合的巡礼施設のアトラス』である。その後も、同センターは、トリノ大学と提携して、世界各地から専門家を招き、諸宗教と各宗教の巡礼施設の類似点や相違点について話し合う「宗教と聖なる山」(Religioni e Sacri Monti)と題したシンポジウムを開催(二〇〇四年)し、その視野を世界の宗教や巡礼施設にまで向けつつある<sup>19)</sup>。

しかし、同センターのこのように画期的な調査・研究活動に対して、イタリアには批判的な見解を示す者もある。例えば、タイトルに同じように「Atlante」という言葉を掲げて二〇〇二年に出版された『アルプス南麓地帯のサク

ロ・モンテの『アトラス』は、二二〇〇一年刊行の『アトラスを、ピエモンテ州のサクロ・モンテしか挙げていない点や、異なる文化的伝統に属する十字架の道やカルヴァリオ等の類似施設をサクロ・モンテと一纏めしている点を理由に不適切だとし<sup>(20)</sup>、そうした類似施設とサクロ・モンテとの相違点をさらに幾重にも列挙している<sup>(21)</sup>。しかし、先行のアトラスの付録の地図上には、報告されたイタリア全州の施設の位置が示されているし、サクロ・モンテをその他の類似施設と一纏めにしたような記述も見られない。従って、むしろ後者のアトラス側の批判の方が、これまで述べてきたアルプス以北の研究の流れを考慮していない上、十字架の道についても確定された十四留の道だけを念頭に置いている点で適切ではないように思われる。両アトラスに見られるサクロ・モンテ観や研究方法の相違は、いずれにしても、イタリア人同士の見解の相違というよりは、旧来のイタリア的なサクロ・モンテ観や研究方法の伝統と、アルプス以北のそれらとの相違に還元されるものであるように思われる。

### 三 日本におけるサクロ・モンテ研究

最後に、日本におけるサクロ・モンテ研究の現状についても見ておこう。日本ではごく最近までサクロ・モンテが研究対象として取り上げられることはほとんどなかった。しかし、それでも、まったく紹介されてこなかったわけではない。

早くからサクロ・モンテの価値を高く評価し、それを日本で初めて紹介したのは坂本満氏であった。そしてそれは、「アルプス山麓のサクロ・モンテ―民衆的バロックの彩色群像」という題目の口頭発表（一九八九年）を通して行われた<sup>(22)</sup>。同氏は、その後も、東洋の代用巡礼建築や代用巡礼地の諸例に類する西欧の例としてサクロ・モンテを挙げた論考（一九九四年）<sup>(23)</sup>などを発表して紹介に努めてきたが、それは現在にも及んでいる。現実性と生々しい再現力もったバロックの産物であるプレセピオとサクロ・モンテの群像を取り上げ、それらが正当に評価されてこなかった理由を、これまでの美術史学の大芸術、ハイ・アート偏重から平明に説いて今後の美術史学の在り方について再考を促したのはごく最近（二〇〇四年）のことである<sup>(24)</sup>。

サクロ・モンテの紹介は、若干の翻訳を通してもすでに行われている。マンチェスター大学やローマ大学で教鞭をとったM. プラーツのマニエリスムとバロックに関する論文集（一九七五年）は、若桑みどり氏らによって邦訳され、一九九二年に『官能の庭―マニエリスム・エンブレム・バロック』として出版されたが<sup>25</sup>、同書の第五部（バロックの宇宙）には、ヴァラツロの施設に関する「サクロ・モンテの礼拝堂」（上村清雄氏訳）と題された論考が含まれている。また、現代ドイツを代表する建築学者、J. ピーパーのヴァラツロのサクロ・モンテに関する論考（「聖なる山―超越へと導くもの……脱現実化された山上の理想都市・サクロ・モンテ」）を含む教授資格論文も、和泉雅人氏らの翻訳によって、一九九六年に『迷宮―都市・巡礼・祝祭・洞窟……迷宮的なるものの解説』としてすでに出版されている<sup>26</sup>。

その後も、サクロ・モンテは、主としてイタリア美術史研究者のあいだで比較の対象にされるか、主要な研究対象として取り上げられる。例えば、水野千依氏は、ロレンツォ・ロットが制作したスアルデイ家礼拝堂の壁画装飾に関する論考（一九九八年）のなかで、その装飾の着想源のひ

とつに、ガウデンツイオがヴァラツロのサクロ・モンテに結晶させた芸術や、「留」によって構成されているサクロ・モンテの構造そのものがあつたのではないかとする興味深い推測を行った<sup>27</sup>。また、同氏は、ごく最近も、近世の北イタリアの終末論的預言や幻視の伝達・普及とイメージとの関係を解明する研究の一環としてヴァラツロの創設期の施設を取り上げ、その形態の表現方法を、創設者の四旬節説教に関する手稿に見られるキリストの生涯や受難の玄義についての解説方法との関係から明察した論考<sup>28</sup>を発表している。さらに、稿者自身も、すでに、イタリアのサクロ・モンテ群に関する初歩的な報告（一九九九年）や、トスカーナ州の唯一のサクロ・モンテであるサン・ヴィヴァルドの巡礼施設に関する紹介（二〇〇二年）、並びに、ヴァラツロの施設の初期の様相に関する考察を行った<sup>29</sup>。次いで大野陽子氏も、「対抗宗教改革期におけるヴァラツロのサクロ・モンテ」と題した論考（二〇〇一年）<sup>30</sup>に続き、「対抗宗教改革期の北イタリアにおけるサクロ・モンテ構想」という題目の口頭発表（二〇〇二年）<sup>31</sup>を行い、それらにおいて、クレアやオルタ、ヴァレーゼといった主要なサクロ・モンテの「中心主題」と「礼拝堂の配置」、並びに「内

部裝飾」の関係を検証して、それらとは異なるヴァラッコのサクロ・モンテの再編構想の独自性とその問題点を明らかにしようとした。さらに、同氏は、本年五月にも、「ヴァラッコのサクロ・モンテ第36礼拝堂へカルヴァリオへの道」礼拝堂における予型論圖像採択の意味」と題した口頭発表を行い、サクロ・モンテに関わる諸問題を意欲的に説明しようとしている<sup>(32)</sup>。

## 結

以上、多くの遺漏を承知の上で、紙幅の許す限り、イタリアのサクロ・モンテに関する世界や日本における研究の流れと現状を手短に概観した。こうした流れを把握した上で、今後どのような問題に取り組みかは、個人の問題意識や置かれている研究環境に大きく左右されようが、まだ初段階にある日本のサクロ・モンテ（類似施設を含む）研究にとっては、どのような取り組みも歓迎されるべきことである<sup>(33)</sup>とは言うまでもない。

## 註

(本ノートは、平成十五年度課程博士論文の第一章二節を縮小したものに、最新の研究動向を若干加筆したものである。)

- 1 *Tractato de li capituli de passione: Questi sono li misteri che sono sopra el Monte de Varale*, Milano, 1514. 同案内書については、拙稿「フラ・ベルナルディーノ・カイーミの「代用エルサレム」(上)」*「藝叢」*第二十一号(二〇〇四年)、三、六一―八頁を参照。
- 2 F. Sesalli, *Breve descrizione del Sacro Monte di Varallo di Vallesia etc.*, Novara, 1566.; idem, *Descrittione del Sacro Monte di Varallo di Valsesia*, Novara, 1570.; idem, *Descrittione del Sacro Monte di Varallo di Val di Sesia*, Novara, 1587.
- 3 A. M. Uzzino, *Guida per ben visitare Gerusalemme nel Sacro Monte di Varallo*, Varallo, 1809.; G. Bordiga, *Storia e*

- guida del Sacro Monte di Varallo*, Varallo, 1830; M. Cusa, *Nuova Guida storica, religiosa ed artistica al Sacro Monte di Varallo, ed alle sue adiacenze*, Varallo, 1857; F. Tonetti, *Guida storica e pittorica della Valsesia e del Santuario di Varallo*, Varallo, 1871; idem, *Guida della Valsesia e del Monte Rosa*, Varallo, 1891 453v
- 4 Gotardo da Ponte, *Come fu istituita e consacrata la giesa de Madonna Santa Maria in Monte*, Milano, 1547; P. Moriggia, *Historia dell'origine della gloriosa Madonna del Monte posta sopra Varese*, Milano, 1594. ヤマローヤに關する彼の他の文獻については、Aa.Vv., *Il Sacro Monte sopra Varese*, Milano, 1981 の終末の文獻田録を註して。
- 5 A. Durio, 'Il Santuario di Varallo secondo uno sconosciuto cimelio bibliografico del 1514', *Bollettino Storico per la Provincia di Novara*, 192, Fasci.II, pp. 117-139; idem, 'Francesco Sesalli e la prima 'Descrizione' del Sacro Monte di Varallo', *Bollettino Storico per la Provincia di Novara*, XXI, fasci. IV, 1927, pp. 379-396; idem, *Bibliografia del Sacro Monte di Varallo e della Chiesa di Santa Maria delle Grazie annessa al Santuario 1493-1929*, *Bollettino Storico per la Provincia di Novara*, AnnoXXIII-1929, pp. 357-405 453v
- 9 井手野のこゝ F. Ghilardi, *San Vivaldo in Toscana*, Firenze, 1885; idem, 'La Chiesa e le Cappelle di S. Vivaldo (spigolature)', *Miscellanea Storica della Valdelsa*, XVII, 1908, pp. 31-55; idem, *Guida al Santuario di S. Vivaldo*, Castelfiorentino, 1936 終末の終末の彼の論考については、拙稿「エーヌカーナ管区サン・ヴィヴァルドの「エルサレム」」「芸術研究」第9号「二〇〇二年」十五頁以降の註を参照。
- 7 M. Sartorio, *Il Santuario di S. Maria del Monte sopra Varese*, Milano, 1839; S. Langé, 'Problematiche emergenti nella storiografia sui Sacri Monti', in Aa.Vv., *Sacri Monti. Devotione, arte e cultura della controriforma*, 1992, Milano, p.2.
- 8 P. C. Brookes, 'The Sacri Monti of Lombardy and Piemonte', *The Connaissanceur*, 1974, Heft750, pp. 286-295.
- 6 R. Wittkower, 'I Sacri Monti, delle Alpi italiane', *Idea e*

- 10 *imagine, Studi sul Rinascimento italiano*, Torino, 1992, pp. 321-338 (原本 ト *Idea and image. Studies in the Italian Renaissance*, London, 1978.)
- 10 G. Kubler, 'Sacred Mountains in Europe and America', in G. Kubler et al., *Christianity and the Renaissance — Image and Religious Imagination in the Quattrocento*, New York, 1990, pp. 413-441.
- 11 サクロ・モンテに関する一九五〇—七〇年頃の美術史的・建築史的研究は数多い。個々の論文については G. Testori, *Il gran Teatro montano. Saggi su Gaudenzio Ferrari*, Milano, 1956 に詳げられる文献目録を参照。拙稿「フラ・セルナルデーノ……(上)」前掲論文 四一五頁
- 11 二
- 12 K. A. Kneler, *Geschichte der Kreuzwegandacht von den Anfängen bis zur völligen Ausbildung*, 1957, Freiburg, 1908, SS. 22-24.
- 14 E. Kramer, *Kreuzweg und Kalvarienberg Historische und bangeschichtliche Untersuchung*, Studien zur deutschen Kunstgeschichte, Band 313, Kehl/Strassburg, 1957.
- 15 L. Andergassen, 'Kalvaria am Kofel', *Der Kofel in Kasteleuth*, Kasteleuth, 1990, SS. 47-114.
- 16 W. Brunner, 'Europäische Kalvarienberge', in W. Brunner et al., *Calvario Tod und Leben*, Graz, 1992, S. 136.
- 17 C. Debiaggi, *A cinque secoli dalla fondazione del Sacro Monte di Varallo Problemi e ricerche*, Varallo, 1980, pp. 24-27, nota. 41.
- 18 G. Gentile, 'Evocazione topografica, composizione di luogo e tipologia dei Sacri Monti', in *Sacri Monti. Devozione... op. cit.*, pp. 90-91.; idem, 'Da Berrardino Caimi a Gaudenzio Ferrari. Immaginario e regia del Sacro Monte', *de Valle Sicida*, periodico annuale, Società Valsesiana di Cultura, Anno VII, n.1/1996, pp. 207-287, pp. 226-230.
- 19 ピエモンテ州とロンバルディア州の計九つのサクロ・モンテが、二〇〇三年にユネスコの世界遺産に登録されたのを記念して、二〇〇四年十月十二—十六日にかけてモンカルヴォ等を会場として開催されたシンポジウム。日本からも本学の守屋正彦教授が出席し、「日本美術における聖なる山と巡礼」(II Sacro Monte e il pellegrinaggio nell'arte giapponese) と題した口頭発表を

- 行った。二〇〇六年二月にクレアの資料センターから刊行された A cura di A. Barbero e S. Piano, *Religioni e Sacri Monti*, Atti del convegno Internazionale, Torino, Moncalvo, Casale Monferrato 12-16 ottobre 2004 は、その会議録である。
- 20 L. Zanzi, 'Introduzione', A cura dei L. Zanzi e P. Zanzi, *Atlante dei Sacri Monti prealpini*, Milano, 2002, p. 14 e nota 10.
- 21 idem, 'Gerusalemme nelle Alpi. Per un Atlante dei Sacri Monti', *op. cit.*, pp. 67-69.
- 三
- 22 一九八九年六月十七日開催の美術史学会東支部例会での口頭発表、併行して、福原敏男氏による「社寺参詣 曼荼羅と巡礼」という題目の口頭発表も行われた。
- 23 坂本満「アルプス山麓の巡礼地「サクロ・モンテ」  
「歴博」六三号、一九九四年二月、四一五頁。
- 24 同右「キリスト生誕の小型群像とサクロ・モンテ」  
「国立歴史民俗博物館研究報告」第一一四集、二〇〇四年二月、一一二三頁。
- 25 M. Praz, *Il giardino dei Sensi. Studi sul manierismo e il barocco*, Milano, 1975 (マリオ・プラーツ著、若桑、他訳、第五部 バロックの宇宙「サクロ・モンテの礼拝堂」『官能の庭—マニエリスム・エンブレム・バロック』ありな書房、一九九二年、五五六—五六四頁)。
- 26 J. Pieper, '3. Das Hinwegführende: Die entwirklichte Architektur', *Das Labyrinthische — Über die Idee des Verborgenen, Rätselhaften, Schwierigen in der Geschichte der Architektur*, Braunschweig/Wiesbaden, 1987, SS. 86-106 (ヤン・ピーパー著、和泉、他訳、第三章「聖なる山—超越へと導くもの…脱現実化された山上の理想都市・サクロ・モンテ」『迷宮—都市・巡礼・祝祭・洞窟…迷宮的なるものの解読』工作舎、一九九六年、一二九—一五七頁)。
- 27 水野千依「絵画の語り、聖劇の語り—ロレンツォ・ロット作スアルディ家礼拝堂プレスコ画装飾をめぐる—」『美術史』一四五冊、一九九八年、特に一四七一—一四八頁。
- 28 同右「ヴァラツロのサクロ・モンテ創設期におけるベルナルディーノ・カイーミの構想—へ場の記憶〈とへ心の巡礼〉」京都造形芸術大学紀要 [GENESIS] 第

- 9号、二〇〇五年、一九六一―二二五頁、
- 29 拙稿「16世紀前半のイタリア美術とサクロ・モンテ」  
「鹿島美術研究」年報第16号別冊、鹿島美術財団、一  
九九九年十一月、八三―一〇二頁、拙稿「トスカーナ  
管区：」前掲論文、九―二三頁、拙稿「フラ・ベルナ  
ルディーノ……(上)」前掲論文、一―三四頁、拙稿  
「フラ・ベルナルディーノ・カイミの「代用エルサ  
レム」(下)」「藝叢」第二十二号(二〇〇六年)、四九
- 30 一七四頁  
大野陽子「對抗宗教改革期におけるヴァラッロのサク  
ロ・モンテ」「鹿島美術研究」年報第18号、鹿島美術  
財団、二〇〇一年十一月、三八七―四〇一頁、
- 31 二〇〇二年五月十七日の鹿島美術財団賞授賞式での口  
頭発表表、
- 32 二〇〇六年五月開催の第五十九回美術史学会全国大会  
(二十八日)での口頭発表表、